新潟の水辺だより

Vol.40

●編集発行・新潟の水辺を考える会　●発行日・1997年1月28日 Vol.40

TOPICS

「考える会」から「汗をかく会」へ－1996年から1997年へ－

昨年の水辺の会の活動は通船川と佐潟を中心に動き、大変活発であったと思います。特に、10月は通船川シンポジウムとラムサールプレシンポジウムを連日でこなすなどハードなスケジュールが続きました。しかし、会員の高度な自主性とフットワーク、ネットワークの良さですべてをのりきることができました。11月末の「ラムサールシンポジウム新潟」も全国から400人近い人々が訪れ、その成果に関し高い評価をいただきました。また、ロールプレイも2月の開港五港シンポジウムとラムサールシンポジウムの2回も挙行し、皆で楽しむことができました。そういえば、どんつき花火大会で駐車場の交通整理もやりました。

今年はどんな展開になるのでしょうか？。今年のおおまかなスケジュールが12月の総会兼忘年会で表のように提案されました。ところで、水辺の会は会の運営に当たって、多数決でことを決したことはありません。会員各自が自分の得意分野で自主的な判断で責任をもって楽しく行動するのが原則であります。表にないことでも、会員の発意で楽しい活動ができればと考えています。

実は、今年で水辺の会が発足してから丁度10年になります。特に思い出されるのは、発足間もない1989年に開催した「水を肴に大いに語ろうシンポジウム」です。その時、今回ラムサールシンポジウムで記念講演していただいたC.W.ニコルさんが特別に参加してくれました。また、自然環境復元研究会会長の桜井　善雄先生（当時信州大学教授）や、よこはま川を考える会の森　清和さんから基調講演をいただきました。撮影が始まったばかりの「阿賀に生きる」のラッシュ上映も行われました。このシンポジウムで「生命にやさしい水辺」という考え方が提案され、それが水辺の会の基本思想に成長してきたように思います。

その後、「水郷水都全国大会」や「自然環境復元シンポジウム」など全国規模のシンポジウム開催にも取り組み、会のあり方を模索し考えてきました。そうした中で最近、ようやく通船川と佐潟という新潟固有の問題を対象に定点的活動が始まるに至りました。これを要約するならば、「考える会」から「汗をかく会」に脱皮し始めていると言えるのではないかと思います。通船川は都市環境の中で、また佐潟は自然度の高い環境の中で、われわれが具体的にどのような関係をつくっていくかが問われているように思います。

そこで、今年は通船川ゴミ拾い大会と佐潟ハス刈り大会を中心に、さらにはチューリップ摘み大会など、一層汗をかくことが進められればと考えています。佐潟ハス刈り大会には、C.W.ニコルさんも参加していただけると約束してくれました。ただ、汗をかくにはそれなりの用意周到な準備やさまざまな人との話し合いが必要であり、一層考えることもしなければならないと思います。皆さんの知恵と汗とが結集することを期待しております。

大熊　孝

'97スケジュール

月	日	内　容
3		県外視察（横浜or富山金沢）
4	13	川舟阿賀野川中州一周と通船川
4	29	花と水のまち
5		黒姫のニコルさんの池へいく
6	上旬	通船川魚釣り大会
8	22～23	全国トンボ市民サミット（紫雲寺）
夏		県外視察（横浜or富山金沢）
9	6	佐潟ハス刈り蓮根料理大会
9	上旬	通船川クリーンアップ
10	5	通船川野草ウオッチング（水辺俳句の会）
11	中旬	通船川野鳥観察
11	中旬土曜日	通船川シンポジウム

Report1 通船川

通船川シンポジウム報告

10月26日（土）新潟市万代市民会館において「通船川ルネッサンスシンポジウム'96」が開催されました。当日はあいにくの雨、アッシーの夫も用があって出かけ、私にとっての交通機関であるバスもその日に限って10分、20分待っても来ず、遅刻はできないのでタクシーで駆けつける有様。（ああー、ツイていない日）

さてさて本題のシンポジウムの今年のテーマは“私と通船川のかかわり”この一年、通船川ネットワークの活動や再生への意見、提案の集約の総まとめです。

「よこはまかわを考える会」の森　清和さんの基調講演から始まり、その中でごみ拾いやカヌーでの川下りなどの取り組みを報告され、都市河川再生の方向性、住民参加の手法など貴重なお話をしていただきました。

続いて相楽さんの水先案内（進行）、パネリストには、大熊　孝先生はじめ、お馴染みの星島さんら14名である。それぞれ、自分にとっての通船川のかかわりや想いを発表。“地域の活性化のために、憩いの場として川の再生”を願う意見や“防災対策、交通機関としての川本来の機能”を見直す意見、川岸に木を植え続け、“街に自然（森）の回復を願う”などの川への想いを語り合い、活発なディスカッションされました。また、会場とパネリストのやり取り（質問）で、住民の本音（生の声）がこのシンポジウムで発言されるなどの成果がありました。ただ残念なことは参加者が少なかったこと…（雨だし、PR不足・通船川も飽きられたのかなーなどと思い反省）。

あつい想いを語り合ったシンポジウム（撮影:高橋 正良）

来年は、多数の地元住民や会員の皆さまの参加を期待し、3回目のシンポジウム開催に向けて、いろんな楽しい活動・イベントを企画していますので、市報にいがた・新潟の水辺だよりに掲載されますので、是非、会員の皆さま、家族連れでご参加ください。

新潟市東地区公民館　大崎　信子

通船川クリーンアップ作戦

秋の終わり、というより初冬の訪れを感じさせる冷たい風の吹く11月10日、午前9時から、「通船川クリーンアップ作戦」が展開された。

これは、通船川ルネッサンス21のメンバーが提案し、通船川ネットワークの新潟の水辺を考える会、東地区公民館、中地区を考える会の共催を得て実現したもので、一連の通船川ウオッチングで培われた関心や人のつながりを具体的な行動に結び付けてゆく一段階として立案されたものである。

クリーンアップ作戦（通船川右岸）（撮影:杉山 泰彦）

集合時間の9時ころは、晴れていたとはいえ前夜からの冷たい雨の名残で寒々とした天候であったせいか、地元の小中学校、地域団体、企業など広く呼びかけたにもかかわらず、予想より幾分か少ない約60名の参加にとどまった。しかし、参加者の熱意は素晴らしく、徐々に回復した天候にも恵まれ、約2時間精力的に清掃活動が行われた。

東山の下小学校とジャスコ裏手の薬師橋のたもとの2カ所に分かれて集合した参加者は、それぞれのグループに分かれて、前者は山の下閘門から第一貯木場まで、後者は薬師橋を中心に第2貯木場から松崎大橋付近までの区間を、堤防や時にはイカダに乗って歩きながら、新潟市から提供、貸与されたゴミ袋とゴミ挟みを両手に空き缶などを拾い集めた。

ゴミの内訳はやはり空き缶が目についたが、その他釣り人の捨てるビニールゴミや雑誌など、中にはバイクのマフラーといった大型のゴミも含まれていた。参加者は、思ったよりもゴミが少ないこと、ゴミに生活の匂いがしないこと、つまりそれだけ通船川が日常生活から縁遠くなっているのかなどといった印象を語り合っていた。拾い集められたゴミは適当な場所に集積され、ボートに乗ったサポート隊と自動車によって最終的には第2貯木場に集められて約100袋分のゴミ袋の大きな山を形作った。

今回のクリーンアップ作戦は9月29日に下見のゴミウオッチングを実施するなど、ひと通りの事前準備を重ねて行われたのであったが、地域住民への浸透や地域団体との協調という対策に十分な時間をかけられなかったという点で残念な面があったことは否めない。平成9年も9月上旬に実施の予定なので、この点の反省を生かしてゆく必要がある。東山の下小学校や同PTAとの連携、中地区を考える会の組織力の活用など、楽しく、意義深くしてゆける要素はたくさんありそうだ。

浅井　敬一

通船川＆ラムサール Report 2

皆様方のご協力で ネットワークの輪が広がる

新年明けましておめでとうございます。

昨年の、通船川関連のさまざまな勉強会は、多くの市民、住民、大江山漁協の皆さんのご協力により突っ込んだ勉強と知識を深めた一年でした。

さらに、通船川下流部の中地区を考える会がネットワークに参加して頂くことになりました。

また、6月29日、中地区を考える会主催の通船川シンポジウムでは新潟県新潟土木 事務所長が通船川再生について個人的試算を初めて公開したことに私たちの活動が 少しずつ認知されてきたことに喜びを感じた。

もう一つ、画期的な出来事があった。10月26日に開催されたシンポジウムではパ ネリストと通船川の最上流部に位置する新川町（新潟地震で一番の被害に遭った）の自治会役員とかなり激しい意見交換が行われた。

「治水を優先したのが現在の姿である。もっと総合的に治水を含めた安全な川作りを考えていくのも一つの方法ではないか」と大熊先生の説明に理解を頂いた。

年末最後の締めくくりは、いよいよ通船川マスタープラン作成がスタートした。新川町の役員も一緒に加わり地元の意見要望等、和気藹々のうちに通船川再生の基本理念、歴史や地域性が感じられる川、基本方針、具体的方策などが検討された。

このように着実に地元住民のネットワークの広がりは、沿川住民の関心が高く、同時に私たちに大きな期待を寄せるものと受け止め一層の努力が求められるものと感じた。

今年は、秋のシンポジウムに間に合うよう遊び心を取り入れながら市民、住民が作ったマスタープランを行政にプレゼントしたいものです。

ほかに、遊びながらの勉強会を開催しますので、今年も多くの方々のさらなるご 協力をお願いし、多数のご参加を期待しております。

皆様のご健康をお祈りします。

通船川ルネッサンス21　星島　卓美

ラムサールシンポジウム新潟 ―人と湿地と生きものたち―

大成功裏に幕を閉じる

去る11月末に開催された「ラムサールシンポジウム新潟」は、全国から延べ1,400人の参加者を集め、3日間の全日程を無事終了しました。新潟市西部に位置する砂丘湖佐潟が国内10番目のラムサール条約登録地に指定されたことを機に、新潟の水辺を考える会やラムサールセンターなどのNGO、新潟市・新潟県・環境庁などの関係官庁が実行委員会を設けて実施したものです。水辺の会では、このシンポジウムを通じて多くの成果を得ることができましたが、同時に佐潟の膝元の市民組織として数々の課題を引き継ぎました。

日程とプログラム

●11月28日（木）第1日目ワークショップ
・開会・議長報告・基調講演・セッション1
「湿地」…万代市民会館・懇親会…東急イン

●11月29日（金）第2日目ワークショップ
・セッション2「人」
・セッション3「生きものたち」…万代市民会館
・公開シンポジウム…NEXT21市民プラザ
ラムサール条約について（釧路国際ウエットランドセンター小林 聡史氏）
ロールプレイ「潟はだれのもの」
C.W.ニコル氏講演「In Our Nature～人と自然」

●11月30日（土）第3日目ワークショップ
・エクスカーション：大型バス3台
（佐潟・鳥屋野潟・福島潟・瓢湖）
・セッション4「佐潟」・閉会…万代市民会館

セッション1～3

セッション1「湿地」では、日本各地から湿地の現状とそれをとりまく諸情勢、ワイズユースの取り組みがレポートされました。未だにその存在が軽んぜられ、存亡の危機に立たされている湿地が多いことが明らかになりました。

セッション2「人」では、湿地保全に関わる法体系や技術、ワイズユースの実践例などについて国内外からの報告がなされました。中でも伊豆沼の住民参加による保全活動や藤前の「干潟の学校」は私たちの活動の大きな参考になるものです。

セッション3「生きものたち」では、全国各地の湿地に住む生きものの現状と、その保護を目ざすトラスト運動などが報告されました。

なお、セッション4「佐潟」については別項に詳しく記しました。本シンポジウムの成果については、地域実行委員会より、後日詳しいとりまとめ報告がなされるとのことです。

Report3 ラムサール

公開シンポジウム

市民向けの公開シンポジウムでは、C.W.ニコル氏の講演に先立ち、水辺を考える会のメンバーを中心とする地元有志によるロールプレイ「潟はだれのもの」が演じられました。16人の出演者が、架空の人ラムサール人や佐潟の水、行政担当者や農民、漁師、地元の主婦、ハクチョウなどの生き物たちに扮して、それぞれの立場から佐潟への思いを語りました。リハーサルでは皆緊張して不安を残しましたが、本番では驚くほどの演技力を発揮し、中には客席の拍手に手を振って応える余裕を見せる人もありました。

地元有志の名演技（撮影:高橋 正良）

ニコル氏は、世界を股にかけた数々の自然体験を通して大自然のすばらしさと大切さを訴えました。ケワタガモの言葉を身振り手振り表現する様子に、氏の生き物へ寄せる限りない愛情を感じ取ることができました。また、イギリス南ウェールズに久々に里帰りして、少年時代と全く変わらない森や水辺に再会した感動あふれる話が印象的でした。しかし、帰国してみると黒姫の自宅裏を流れる川が無惨に改修され、河畔林は伐採され、まっすぐな水路に変わりはてていたとのこと。その衝撃と悲しみ、自然の価値を理解しようとしない人々に対する怒りは、客席の私たちの胸を打つものがありました。

ニコル氏の行動の真骨頂は、自然保護活動だけにとどまらず、周辺の荒れた林野を買い取り、豊かな自然を復元・創造している点にあります。水はけの良くない悪条件の庭に大きな池を掘り、水草を植栽して魚を増やし、水生昆虫やトンボ、カワセミを呼び寄せる。世間では厄介者のサギたちさえも、増えすぎたコイの数をコントロールしてくれると歓迎する。次々と池に定着する生きものの顔ぶれを観察し、生態系の多様度が増していく様を喜ぶニコル氏の姿勢にナチュラリストの神髄を感じました。最後にニコル氏は、佐潟にかける新潟市民有志の情熱に共感し、一緒にハス刈りなどの実践に参加しようと語ってくれました。

セッション4「佐潟」

最終日のセッション4「佐潟」では、大熊会長の進行の下、佐潟の歴史と生物相の現状、近隣の湖沼における市民運動や水鳥をめぐる状況について10の事例研究・活動報告がなされました。さらに佐潟の保全と公園化計画をめぐって、会場の参加者を交えて活発なディスカッションが交わされました。新潟市としても、この論議の結果を今後の公園化計画に反映させると表明しています。しかしながら、その具体的な方策については現時点では充分なコンセンサスが成立しているわけではありません。まさに私たち住民と行政に残された大きな課題です。

佐潟は水源地として重要であったために干拓を免れ、かつては地元赤塚の方々によって「潟普請(かたぶしん)」や「掻き上げ（かきあげ）」等の管理が行われてきた。まだ、潟を利用した内水面漁業、蓮根やヒシの実の採取、ヨシの刈り取りなども行われてきた。このような住民の働きかけの結果、潟環境が保全され、生物の多様性も維持されてきた。しかしながら、近年では漁業は下火になり、人々はしだいに潟に踏み入らなくなった。潟端の水田が耕作されなくなり、一方では潟の水源地でもある砂丘地の農業がさかんになっていった。

この結果、ヨシ群落が拡大して陸化が進行し、デンジソウその他の希少な水生植物が次々に姿を消しつつある。植物枯死体に由来する湖底堆積物やヘドロの急激な増加のためにカラスガイが減少し、タナゴ類も減ってきているとの報告もあった。鳥類相も植物群落の変化を受け、水際・湿地性の水鳥が減少し、草原性のチュウヒが繁殖するようになってきている。砂丘地農業では400kg/haもの大量の窒素肥料が用いられ、その43％が地下に浸透し、深刻な地下水汚染を起こしている。この結果、潟の富栄養化が進行し、ヨシの過繁茂に拍車がかかっている。地下水汚染を低減する環境保全型農業への転換、ヨシ刈り等による潟外への窒素の持ち出しなど被物群落の適正管理についての提案がなされた。

鳥屋野潟からは市民参加型の水質調査や水質浄化試験等の実践報告がなされ、福島潟からはオオヒシクイの食料であるマコモ供給量の確保のため、ヨシ群落の制御の必要性が報告された。また、標識コハクチョウの行動調査結果から、湖沼や河川のほか餌場でもある水田を含めた新潟平野全域をラムサール登録地にしていく必要性が指摘された。

新潟市公園緑地課からは、昭和57年から整備を進めている「自然生態観察型公園」の概要が報告されたが、ディスカッションの場面ではこれに対する懸念や再検討を求める意見が相次いだ。市の公園化計画では「都市公園」としいう位置づけがなされ、人工的な色彩の強い公園整備が進められているが、「自然公園」として環境を保全しながらワイズユースを進めていく方向に転換すべきだという意見が大勢を占めた。また、このまま公園化計画が進んで潟の奥の方まで人々が入り込むようになると、警戒心の強いガン類は寄りつかなくなるという指摘もなされた。新潟市側からは、これらの意見を参考にして市民や専門家の声を聞きながら今後の計画を進めて行く旨の発言があった。

井上　信夫

ラムサール Report 4

ラムサールシンポジウム新潟エクスカーション

たった一度の集まりで新潟市役所環境対策課、にいがた野鳥の会、白鳥の会、瓢湖の白鳥を守る会、豊栄市役所、福島潟野鳥の会など各地域の担当の方々に、こんなお願いをするのはどうかと思っていました。つまり、150人の方々に佐潟および鳥屋野潟、瓢湖、福島潟の四箇所を半日でお見せするという無理難題なのです。これを解決するには、日頃ご無体なお客様に応えるため使っているパートの手法を駆使し、担当者に押し付ける他はありませんでした。

これこそ完璧、緻密なスケジュールと思ってみたものの、本当に予期せぬ3号車のパンクには驚きました。3号車の乗客の皆様はじめ、快く明け渡していただいた1号車の皆様、心配して下さった2号車の皆様、補助車担当者、バス会社の皆様のおかげで予定時間を15分ほどすぎただけで無事次のセッション会場にたどり着いたときはほっとしました。

限られた時間の中で真剣に望遠鏡を覗く（撮影:杉山 泰彦）

事故をものともせず、むしろプラスに添加して、新潟平野、蒲原平野の成り立ちから潟の存在価値を強行スケジュールの中、どれだけご理解いただけたのか分かりません。感想ラベルがたくさん私の手元に残りました。参加者の皆様、担当者の皆様重ねてお礼申し上げます。ありがとう。

編集鳥=長　高橋　正良

感想ラベルの一部紹介

佐潟について

地域住民の参加について

佐潟については住民参加のスキがいろいろあるように思います。ガンバッテ下さい。

佐潟についてはもっと近くの人がよく知って守っていくのがいいと思いました。

公園計画について

ラムサール条約指定地の公園化には反対です。ラムサール条約指定地はその地域のものではありません。世界のものです。

やはり公園化計画の全面見直しが必要である。

地域と一体になった整備について

佐潟周辺の農地（特に畑地）を公有化し、潟と一体としての整備を進めてほしい。

ハスについて

1.佐潟ーハスは沢山あり、やはりハス取りの必要性が感じられました。

佐潟ーハスが水鳥のかくれ場所として大切な役をしていることを感じました。

今後、ハスも含め生態系を維持することが大切だと感じました。

景観の保全について

佐潟ー弥彦山をさえぎるゴルフ場ネットやめてほしい。

佐潟を糸口にした湿地の保全について

十分資格しいラムサール登録地だと思います。その他の大切な新潟の湿地を守るための「イトグチ」になれるようになったら幸いと思います。

水鳥に配慮した施設について

佐潟の観察施設、福島潟のリーティング事業は水鳥にすくなからぬ影響があるように思われた。特に前者は水鳥に関する施設整備があるだけに配慮不足が気になった。

Report 5 ワークショップ

百十年前の橋造り職人の想いやいかに「万代橋ワークショップ」(2)

私たちは歴史からその価値を学び、次の時代へ価値を重ねてゆく”つなぎ役”の存在である。果たして、坑木に橋に何を重ねてつなぐべきでしょうか？

NEXT21（1Fアトリウム）は討議の熱気で一杯だった（撮影:高橋 正良）

橋の抗一本、公開討議の意味

この万代橋坑木ワークショップには歴史的な意味が内包されている。主催者はだかか坑木1本である。しかし、万代橋坑木ワークショップで討議することは、小さいテーマではあり、そこでは参加者の合意を求めても決定は求めないという条件を前提にしているため拘束力はない。しかし、参加者が求める達成感は高いのかも知れない。

少なくとも、1）具体的な公共物の整備のあり方について行政も参加した実行委員会主催で公開討議をしたことと、2）ワークショップが市民に新聞ラジオで告知され、官・学・民の対等（パートナーシップ）な雰囲気の中で行われたことは、（多分、県内で最初だろう）記念すべき意味がある。

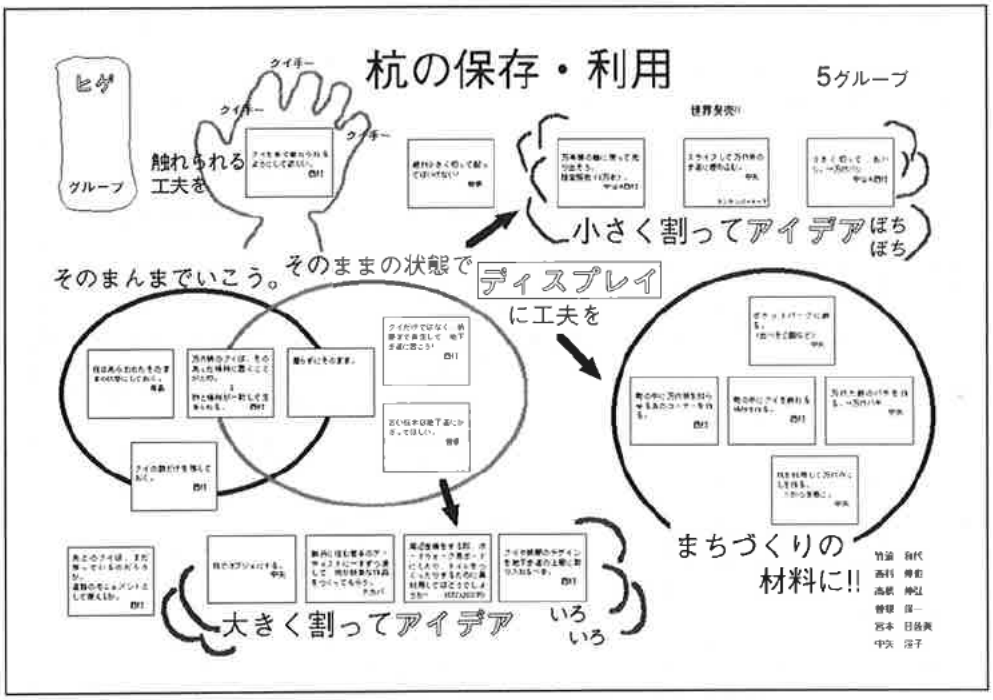
橋が道路局の管轄であり、河川局には関係ないのかもしれないが河川事務所の方々にも参加して欲しかった。参加者は立場を越えて対等であり、個人的な存在であることがワークショップのルールだから。

因みに、多人種の国アメリカでは、審議会や委員会と並行して公開型の公聴会やワークショップは、極日常的なこととして行われている。朝から晩まで、いろいろなテーマでワークショップが開かれている。市役所や集会所や学校で、芝広場で。

ワークショップって何屋さん？とい言う人がまだ多い。だから、全員参加で討議することと分かっていただく＝市民権を得るまで新潟ワークショップ研究会の活動はやめられないだろう。

（研究会の紹介:村上、神林、新潟、亀田、新津、津川、三条、大和、六日町、川西、新井に現在30数名の会員／山賀、南雲、山下世話人、林 泰義顧問）

世話人　相楽　治



万代橋抗木ワークショップの討議のフローチャート（一部紹介）

緊急レポート Report 6

重油と苦闘
三国町（福井）でボランティア

1997年1月15日成人の日、成人を二回ほど迎える有志11名が参加して、ナホトカ号の船首部分が流れ着いた福井県三国町で、重油から少しでも海や生きもの達を守ろうと、回収作業に参加した。

決意は軽やかに、準備は慎重に

同じ日本海の恵みを受けるものとして、阪神大震災でボランティアの役割は大きかったことや、現地で受け入れ体制を作ったことなど、とにかく現地に行こうと決断。13日夜から水辺の会事務局メンバーが緊急に呼びかけ実現した。

真っ黒な油の塊を、手作業で除去

岩場の多い浜辺は、真っ黒に汚染され、悪臭がたちこめ、飛んでいるカモメの腹は黒光りしていた。

重油除去作業（撮影:鈴木 謙輔）

運搬作業（撮影:鈴木 謙輔）

船首が座礁している地点から1,000m程東側の磯部で、用意したゴムガッパを着込み、完全なスタイルで作業開始。前線の影響で海がシケていたため、海岸の清掃や、重油が大量に溜まっている波静かな磯部に入って回収作業を行う。重油はタールのようにドロドロに固まっており、それを杓ですくいだし、バケツにため、岸のドラム缶まで運び上げる。30分もすると服に油がベットリ。岩場は油で滑りやすく、足場の確保に難儀をする。しかも岩と岩の間に入り込んで、こびりついて油を取るには、人手による手作業しかない。

ボランティアが力を発揮、活躍

新潟から預かってきた、カンパ金や物資を現地のボランティア本部に届ける。本部はたいへんな活況だ。15日だけでも1,700人のボランティアが集まった。すっかりボランティアは、自衛隊等の災害復旧のプロ集団として、しっかり重要な役割を担っていた。

救援物資を運び入れる（撮影:高橋 正良）

今回、福井にいって阪神大震災をきっかけに、災害ボランティアの役割が認識されてきていることを痛感した。一旦事があれば、全国からボランティアが集まる時代になってきた。しかし、新潟県では北蒲原地震では受け入れ体制が出来ず断わっている。災害時にはボランティアの役割が大きいだけに、早急に受け入れの窓口の整備し、コーディネイトするノウハウ、人の育成が必要だ。

小泉　仲之

※窓　口
新潟県社会福祉協議会ボランティアセンター
電話　025-281-5527

※ボランティア連絡窓口
新潟県環境生活部生活企画課
電話　025-285-5511　内線2478

Report7 海外水辺レポート

ポートランド紀行

ポートランドは北米の太平洋に面するオレゴン州の中都市で都市計画で先進的な取り組みをしている。人口は40万人程度であるから新潟と同じ程度の規模である。緯度は北海道より北であるが暖流の影響により比較的暖かい。今回、要松園の土沼氏と高橋編集鳥とポートランド・シアトル・ビクトリア・バンクーバーの日本庭園を東京庭園OBの方々と訪問する機会を得た。

ポートランドに限らず北米都市の第一印象は、まずその緑の多さ、特に都市部の街路樹の豊かさと、広大な水辺の環境であった。まず、歩道は全体的に新潟の2倍程度の広さでありその半分を緑地帯が占めている。しかも、芝がベルト状につながっていて緑の存在感を感じさせた。また、公園が規模が大きいことに驚かされたし、高層ビルを都市の中心には位置させ、そこには都市型の公園（大規模な滝や噴水、コンクリートを組み合わせている）を配置して、その周辺に住宅地が広がり、都市計画のメリハリを感じさせた。

コロンビア川左岸 クラウンポイントを望む
（撮影:高橋 正良）

水辺はコロンビア川の河岸を見学したが、巨大な中州や湿地の広大な風景が印象に残った。川幅は阿賀野川くらいであるが、水温は低く気候的には亜寒帯に近いのではないかと思う。郊外ではコロンビア川は護岸はあまり手が加えられておらず、湿地帯と川が平行に流れている箇所もあった。また、漁業資源の保護回復の手段としてマスや、チョウザメの養殖場があり、無料で見学でき、市民に啓蒙・啓発できるようになっていた。一般道のわきにも、森と川が平行になっている地域が多く、その中に住宅が点在していた。

市街地では川はコンクリート護岸であるが広々とした公園が河川と平行しており、市民が憩える工夫を感じた。水の豊かさを意識できる噴水や、ヨットハーバー等親水性をアピールしている。

交通事情は、都市の機能集中のため道路事情はかなり悪化しているとのことであった。その解決手段として、地下鉄の整備が行われたそうだ。この事業に関し市民の取り組み、コンセンサスの形成は先進的な都市計画の事例の一つとして紹介されている。『サスティナブル・コミュニティー』（学陽社）ポートランドはその意味でも先進的な町づくりとして学ぶべき事が多い。

大まかな感想として以上のことを書いたが、全体として2つのことを考えさせられた。一つは自然（自然生態系）と人間との関わり合いである。人間は古くは自然のサイクルの中で生活していたのであるが、文明の発展とともにこれを支配征服するようになっていった。但し基本的に人間は製造者ではなく消費者の立場から逃れられない。とすれば人間は地球に対してなんらかの支払うべきコスト、ないし保全に対する責任が当然発生してくるのではないか。

それは再び自然に対して共生の姿勢を模索することではないかと思う。それは誰のためにするというものではなく、私自身が生き延びていくために必要ことなのだと思う。そのためのコンセンサスづくりをもっと積極的におこわなければならない。その思いを強くした。

もう一つには、都市計画とは誰のためのものなのかということだ。新潟の万代島の再開発、鳥屋野潟南部の再開発にどれだけの市民が参加しているのであろうか。地域の住人はどう関わっているのであろうか。商店街との接続や農地との関連はどうなっているのだろうか。将来の利用方法に問題はないのだろうか。交通網の整備等はどうなるのであろうか。発展に持続可能性、循環性、再生可能性があるのであろうか。私はこういう状況に対し、もう少し声を上げていく努力をしていきたいと思う。

五十嵐　実

海外水辺レポート Report 8

私のカヌー旅日記
Aotearoa（長い雲の島）NZの自然と生活～水辺の会に送る最新情報～

1996年4月より、1年間、学術研究調査でニュージーランド(NZ)に滞在する機会に恵まれました。

テーマはこの国の河川・海洋スポーツの制度と教育カリキュラムについて、言い換えれば、この国の人々が地域の活動や学校教育の中でどの様に野外活動の技術や知識を獲得し、楽しんでいるかを明らかにする事です。

特にヨットやカヌーは日本と自然条件が類似しているものの、どの家も庭先にはヨットやカヌーが見受けられます。国土は日本の70％で人口が350万人、その割りにはカヌーやヨットをはじめ野外活動を楽しむ人口は多いようです。いりくんだ海岸線や自然条件が大いに原因しているかもしれない。ラグビー国家、ヨットのアメリカンズカップを始め多くの競技でも圧倒的な強さを誇り、スポーツや自然と共に生活があるようです。

きれいな水は牧場のないナショナルパークや湖からの流れだしです。(撮影：土方 幹夫)

家の近くの公園地などには朝夕や週末は多くのパドラーが楽しみ、小さな競技が頻繁に行われています。日本との決定的な相違点は経済的な負担が少なく、子供から大人までが夢中になって遊ぶ点です。

エベレスト登山で有名なヒラリー卿の「冒険とチャレンジ精神」が子供の教育の基本にあり、彼の財団活動OPC（The Sir Edomond Hilary Outdoor Persuits cetre of Newzealand）の影響は大です。

9月、国技とも言えるラグビーがようやく終え、夏のスポーツにこれからはなります。地方政府は地域に拠点となるクラブハウスを建設し、スタッフの自主的な運営に委ねています。先ず楽しむことを重視しているようです。大人達が率先して楽しむ姿が目につきます。街の大きな公園の池では寒い時期でも朝晩の僅かな時間を使って練習をしています。結局は、この国の人々の生活観、真の個人主義と合理主義が徹底しているようで、実に素晴らしい事です。

自己の価値観が確立しており、矛盾を排除した生活をしている。国が国民のために存在していると感じます。他人に気兼ねせず、自分の生活を十分に楽しんでいる。日本のようにスポーツにお金がそんなにかからない条件が整っている。

金曜日の夜は友人とのパーティーや飲み会で、週末は家族で地域のスポーツ大会（ネットボール、ラグビー、クリケット、サイクリング、ドライブ、）等に時間を費やしている。種目も季節に応じて組まれており、ゴルフフィーは1000円位だし、自分達で比較的自由にラウンドして、勿論キャデー等いない。日本のような練習場は一ケ所、Gisbornと言う日本と交流を盛んにしている町でみかけただけ。大型ヨットのバース代金は日本の1／5以下で、トレーラーで自宅の庭に置く家が多いようです。

車検制度は極めて簡単でタイヤ、ライト、シグナルのチェックで6ケ月間で10,000円、どんな車でもパス、傑作なのは家ごと大型トレーラーで牽引します。自作・改造車もおおく、トレーラーが普及していますし、物を大切にします。古さの価値を認め、ガレージセールを始め、中古品の売買が盛んです。

ヨットは殆とが自作艇で、カヌーを含めて船を持つ家庭が実に多く、地域や種目による組織化が発達し、水辺は舟の出入りスロープが開放されています。

確かにモラルが小さい時から確立しているようです。収益事業本位、所得水準によって楽しみ方まで左右させられる日本のスポーツ状況とは随分と異なります。

4月にNZに着いて、先ず印象に残った事は、ごみと看板が少ないこと、日本の中古車がやたら多い事、何処にもラグビーコートがあること、トイレと公園が完備している事等です。牧場だらけで車は100km/h以上でとばし、兎やオポッサム（布袋類でコアラに似た有毒バクテリアを発生する）の死体が散乱している。自然環境の良さと思っていた観光的景観の美しさへの感動は、私の錯覚である事に最近気づき始め、些か失望しています。

マクドナルドが開店すると、その周辺はごみが散乱し、都会に行くほど混雑と汚れが目につきます。山奥の牧場やホテルの水洗トイレとすぐ出るお湯は便利ではあるりますが、汚水処理や環境整備、道路交通整備等の環境衛生等の施設や公共投資が見えにくく、技術水準が低い。意図的なのか、この国の河川や海岸の自然的状況は実は開発途上の未分化さなのです。護岸工事もせず、雨後の増水で川岸はえぐられ、土砂は流出する。恐らく時代の進歩と経済発展と共に日本の様に全てが人工化されるのかも知れません。

・・・つづきは次号41号に

土方　幹夫

Column コラム

和解
その後の新潟水俣病

歳の暮れに、杉山さんから原稿依頼の電話があった。内容は「新潟水俣病問題のその後」で締め切りは正月休み中だという。人にものを頼まれればイヤとはいえない性分ゆえ、なんでもすぐに請け負ってしまっては後悔しているのである。ましてや正月なんぞは完璧に朝から晩までナラ漬け状態で新年会をこなし、原稿どころではないはずなのに、である。しかし、せっかく与えてくださった機会なのだから、ナラ漬けの頭で昨年の私のノートを1月からひっくり返しながら、和解後の新潟水俣病を考えてみた。

ご承知のようにこの事件は30年目にしてようやくその苦渋に満ちた和解を迎えるのだが、我々、映画「阿賀に生きる」を作った仲間たちは31年目から応援歌として「それぞれの阿賀」展を企画した。

1月に地元の安田町から始まった巡回展は一旦、川を逆上って津川町で開催、2月には三川村、村松町、水原町、豊栄市と川を下りながら、3月には新津市、横越村、松浜、そして五泉市と毎週のように開催地を変えながらの3ヶ月にわたるジプシー写真展は決して楽なものではなかった。しかし、各地の実行委員との新しい出会いや地元アマチュアカメラマン、画家の参加は何よりも嬉しく楽しかった。

この日のためにやった「それぞれの阿賀」流域展
（最終会場の五泉市で）写真・伊藤 芳保

4月には毎年恒例の新潟大学医学部新入生歓迎の現地調査ツアー、被害者たちは大学検診での屈辱的な扱いを訴え、真剣に聞き入る医師の玉子たちに熱い期待を寄せていた。

5月、上越教育大学院生も新潟水俣病を研究テーマに現地を訪れ、その後分厚い研究報告書を送ってくれた。

やったぜ、明訓放送部！（新春早々、機材の盗難にあった彼等にご支援を）神田共立講堂前で　写真・小尾 章子

6月、「それぞれの阿賀」展で出会った明訓高校放送部制作のビデオドキュメンタリー「生きているうちに・・・」が県大会で1位となって全国大会出場を決めた。映画「阿賀に生きる」のタイトルなどを揮毫した書家小山素雲氏の個展と映画上映が上越市で行われた。

7月、明訓高校放送部の「生きているうちに・・・」が全国大会で5位入賞。支援組織の勝手連が結成され、都内で盛大な祝賀会がもたれた。阿賀野川の支流、都辺田川で「川とふれあう会」今年は荒井六男先生をゲストに親子で楽しく賑やかに開催された。

8月、西会津町で「阿賀に生きる」の上映と講演会。お盆にはNHK教育テレビで「阿賀に生きる」がノーカット一挙放送。新潟総合教育研究センターが「阿賀に生きる人々に学ぶ」研修バスツアーを企画、被害者と現地交流会。同様に大阪市立大学自主講座ご一行交流会。

9月、明訓高校学園祭で「それぞれの阿賀」写真展と「阿賀に生きる」「生きているうちに・・・」の上映会。

10月、「阿賀よ忘れるな」出版記念集会でフォトジャーナリスト中村梧郎氏の記念講演会。BSNラジオ特別番組「ニセ患者と言われた234人の闘い」の制作に全面協力。「水俣・東京展」に写真展と講演？で参加。

「水俣・東京展」に参加しはずの新潟組は途中で抜け出し東京見物へ（二重橋前で）写真・村井　勇

11月、新潟大学学園祭で「阿賀に生きる」の上映と関係資料の展示。共闘会議主催の現地調査で水俣患者連合と交流会。豊栄市立岡方第一小学校で公害授業に参加。

12月、安田町立保田小学校で公害授業に参加。岡方第一小学校の水俣病資料館をつくった子供たちの招きで紙芝居、ビデオ作品などを明訓高校放送部の諸君らとともに見学する。

といった具合で解決後の96年も私のノートは水俣病のことでびっしり。そして、きっと今年も同じだろう。なぜなら解決とは言うものの被害者の置かれている状況に大差はなく、むしろいくらかのお金を手にしたことによって、新たな差別構造さえ生まれているのであるから。「水俣・東京展」で一緒に行ってくれた被害者の一人は挨拶替わりに「阿賀の流れは～」と自慢の喉を披露し大喝采。明らかに悲惨さが強調された水俣のテントとは新潟は違っていたのだ。そして、新しい歳を迎えた今、私はあらためてこれだと思った。風や川の流れを読み、魚と対話した川の民としての誇りと自慢の喉を大いに聞かせてもらうツアーのスタートなのだ。

旗野　秀人

会員紹介 MEMBER'S

渡辺　関靖

[redacted]

『「源風景」思いだし　「現風景」に反省を』
昔の江戸・大阪はもちろん新潟でも都市景観の主役は、縦横に走る堀川であった。しかし、現代人達は、それらを簡単に捨て去って行く。水質汚濁・自動車時代・土地の高度利用といろんな理由をつけてつぶしてきた。都市景観の主役である堀川がどんなに価値ある地域資産か改めて考え、自ら「源風景」を思い起こし、一人ひとり「現風景」の在り方を反省すべき時かも知れない。　『川→小阿賀野川』

南波　弘恵

[redacted]

私の趣味の一つにウォーキングがあります。コースに沿を歩く事がありまが、そこを歩いて見る花、鳥、草がいつまでも自然のままでいてほしい。そして水辺を守りたい。ニコル氏の話し。私はすごく共鳴しました。どうぞよろしく。
好きな水辺は、昨年6月に埼玉より越して来ましてまだ歩きたりてませんが、住まいの近くの「やすらぎ堤」が気に入ってます。

鈴木　謙輔

[redacted]

新入ほやほやの会員です。よろしくお願いします。住所の通り、自宅すぐ近くが信濃川右岸です。小さい頃、親に連れられてその土手へ夏の花火大会を見に行ったものです。今は、周囲の風景も変りましたが、そこが、私の好きな水辺でしょうか。

川合　純文

[redacted]

公の専門分野は新潟水俣病。私の専門分野はフライフィッシング。名前同様、どちらも「川」がフィールドです。公私とも、川を舞台に、より広く活動したいと思っています。
阿賀野川とその支流群によく出没しています。

岩瀬　晴夫

[redacted]

横浜在住の時（H3～H6）、「よこはまかわを考える会」に入会し、全国ネットワークの重要性を知りました。それ以来、情報をもらうばかりでした。申し訳ないと入会する次第です。

株式会社 グリーン興発

[redacted]

我社は、十数年来汚れた河川、湖沼を浄化するという事業に取り組んでおります。
しかしながら、新潟の河川等が本当に昔の姿を取り戻しつつあるかには疑問があります。数々の講演を拝聴致しまして微力ではありますが企業としてお役に立てる事を模索して参ります。

EVENT & BOOKS

イベント情報

1 第6回地域づくり団体全国研修交流会

日　時●1997年2月14日(金)午後12時・2月15日(土)午前9時
場　所●焼津市文化センター　参加費7,000円
内　容●基調講演／それぞれの地域づくり～実践事例紹介～／パネルディスカッション／志太ミュージカル「夢」／交流会／分散研修会／
主催：地域づくり団体全国協議会（03-5202-6135）

2 英国マージー川流域交流フォーラム

日　時●1997年2月15日(土)午前10時～2月16日(日)
場　所●ラポールシアター　参加費1,000円
内　容●国内事例報告（多摩川・鶴見川・相模川）／マージー川流域キャンペーンの事例報告／パネルディスカッション／交流レセプション／
主催：マージー川流域交流イベント実行委員会（045-546-4337）

3 『地域活性化フォーラム』～Iターンで地域を拓く～

日　時●1997年2月15日(土)　午後2時
場　所●ヤクルトホール　参加費無料
内　容●パネルフォーラム／勝部 領樹・俵 萌子他／
主催：(財)地域活性化センター（03-5202-6134）

4 ゆきみらい'97in長岡

日　時●1997年2月20日(木)午後1時～2月22日(土)
場　所●長岡リリックホール他　参加費無料
内　容●全国克雪・利雪シンポジウム／全国雪技術・情報交流プラザ／雪と道路の研究発表会／除雪機械展示・実演会／長岡雪しか祭り（同時開催）／
主催：ゆきみらい'97in長岡実行委員会（0258-33-3404）

5 '97「花絵」&「花と水のまちネットワーク」

イベント日時●1997年4月29日(火)　花筏
展示期間●1997年4月30日(水)～5月5日(日)
展示場所●新潟駅南（万代口）／万代シティ／NEXT21（1Fアトリウム）
内　容●捨てられてしまうチューリップの花15万本を使って「花絵」を展示します。
主催：にいがた花絵プロジェクト実行委員会（025-223-4187）
問い合わせ先：花と水のまちネットワーク（025-234-1153）

6 第22回『火消し祭・どんつき』

日　時●1997年5月18日(日)　午前11時
場　所●別記（内容）
内　容●NEXT21・はしご乗り・時代行列／西堀ローサ・ステージショー／古町・どんつき村・火消し一行・火の童謡一行・山車の引き回し／万代シティ・どんつき村・はしご乗り／主催：消防記念新潟保存会・一番会（025-260-1203）

書籍情報

1 『ECM1993～1995REPORT』&『自然学校宣言』

「ECM1993～1995REPORT」

「自然学校宣言」

会津の環境システムを創る会から『ECM1993～1995REPORT』（1420円）が、日本環境教育フォーラムから『自然学校宣言』（1000円）が編集鳥=長宛にそれぞれ送られてきました。前者は自然と暮らしとの調和をテーマに会津の特徴を生かした「新しい環境システム作り」を会津大学を中心に目指すものです。後者は自然体験型環境教育を中心に活動を進め、活動拠点として指導員が常駐する自然学校の大切さを呼びかけています。閲覧や購入希望の方は編集鳥=長までご連絡を。

『新潟の水辺を考える会』ご案内

会員数：個人142人、法人12団体（1997年1月現在）代表：大熊　孝（新潟大学工学部教授）年会費：個人2,000円、法人10,000円連絡先・事務局：〒950-21 新潟市大学南1丁目7821-5 Phone 025-263-2733　Fax 025-263-1134 株式会社グリーンシグマ内

「新潟の水辺を考える会」は、水辺に親しむ人々の集まりで、遊び心半分・まじめ心半分で活動しています。自分の足で水辺を歩き、自分で感じたことから、自分達の水辺を発見したり考えていくことを大切にしています。

設立は1978年10月1日。水辺に関わる自然・歴史・文化・生活・風俗、遊び・スポーツ・レクリエーションならびに科学技術を探り、これからの水辺の望ましい姿を考え、地域の生活向上に寄与することを目的としています。

活動内容は水辺ウォッチング、水辺シンポジウム、水辺環境の整備に関する学習会、会報『新潟の水辺だより』発行（年6回）、全国の水辺グループとの交流、全国の水辺シンポジウムへの参加、国内外の水辺環境の取材・研究などが中心となっています。

1995年より新潟市東地区公民館の主催する環境講座に協力し、新潟市東部を流れる通船川（つうせんがわ）をテーマに活動する「通船川ルネッサンス21」と、ゆるやかなネットワークを形成しました。

今後も、いろいろな地域からいろいろな分野の人達が集まって、それぞの世界がもっと広がっていくような出会いの場づくりをするとともに、そろそろ「考える会」から、「汗をかく会」へ脱皮しなければと考えています。

皆様の参加をお待ちしております。

編集後記

おめでとうございます。新年からこの膨大な原稿量です。サザンウインドの中は入力と編集でてんてこまいです。うれしいですね。でもできれば原稿は、インターネットの電子メールでほしいです。(masayosi@on.rim.or.jp) MS-DOSのフロッピーでもありがたいです。つぎはワープロできれいに打ちだしたもの。スキャナで読んでデジタル文字に変換してしまいます。一番の苦労はFAXと手書き。コンピュータもこれを認識するまで進んでいません。

去年はまじめに勉強とイベントでした。通船川とラムサールの二本は充実でした。今年はもう少し遊んでいいのじゃないかと思ってます、水辺の会は。4月29日予定の通船川をチューリップ舟がいく、というのは楽しいですよ。きっと。通船川マスタープランも楽しみながら作りましょう。

1997.1　編集鳥=長　高橋 正良

●事務局　〒950-21新潟市大学南1丁目7821-5　(株)グリーンシグマ内 Phone 025-263-2733 Fax 025-263-1134
●編集　〒950 新潟市関屋1422-10　(株)サザンウインド内 Phone 025-234-1153 Fax 025-234-1173
●URL　http://www.on.rim.or.jp/~sugiyama/mizube.html